

”ある小学生のお話”

「こんにちは～」 自転車用ヘルメットを外しながら自分の席に着き、テキストと筆記用具をカバンから取り出し、早速テキストを広げる。勿論、彼もここまではみんなと同じ行動を取る。しかし、その後彼は鉛筆を持ち、字を書き始めるのは、10分か15分後位である。ホント長い間黒板の一点を見つめ、あるいは教室の壁に張ってある掲示物をじっと見つめ、時折テキストに目を落とすも問題を考えている表情はない。声を掛けると、慌ててテキストに目をやるもそれまで。その内に彼は、テキストの余白や机の上に計算を書き始める。3分も続いたのだろうか。椅子の上にあぐらを組み、腕を組んでは再び壁や黒板を見始める。この間自分からは一言も話さない。じっと黙って座っている。頻繁に時計を見る。

何度か彼と話をしたことがあった。でも、彼は塾はやめたくないと言う。55分個別指導の中でただの1回、テキストの見開き2頁を、答えだけを残し計算過程を見事にきれいに消して持ってくる。間違えても、絶対に自ら進んで直しはやらない。一緒に直しを行うも、自分ではその直しを書かない。

再び彼と色々と話し合ってみた。おそらく彼と話した人は、一様に途中で話を打ち切ってしまうだろう。小5にして生意気な態度を取り、話が核心に迫ると話をはぐらかし、避ける。当時私はある研修を受けていたことからピンとくるものがあって、それから学習のペースは全面的に彼に任せ、最初にその単元の基本原則をしっかりと指導した上で演習させ、彼ができたものは誉め讃え、間違えは極力優しく丁寧に教えながら、すべてを彼のノートに書いていくことにした。

今年の初め頃か、柔道を習い始め、クラスのみんなの前で模範演技やって見せたことがあり、みんなから「すごい！」と讃えられたことがあってからか、彼の態度に変化が現れ始めた。

当スクールの小中学生部では、月に一回作文指導がある（中学生は希望者）。日本作文指導協会から毎月2つのテーマが出され、生徒は自分でそのいずれかのテーマを選択し、それについて400字程度の作文を書く。それを同協会に送ると、同協会の専門の先生が実に丁寧な添削指導をしてくれ、指導ポイント付きで当スクールに送られてくる。そして、それを元に当スクール担当講師が当該生徒に作文指導をするシステムである。

彼は第2水曜日にやるこの作文教室の時は、いつもと全く違って実に意欲的に取り組む。当スクールの時と同様に、学校でも余り話さないと言う彼にとって、この作文は彼の自己表現のよい機会なのだろうか？6回ほど書いた彼の作文を読むと、やはり習い事のために自由に遊べる日が少ないことに対する不満は表れている。それでいて、「塾はやめたくない。」と言う彼の言葉も全くの嘘ではないようだ。このところ学校の勉強が難しくなってきたと感じており、塾で勉強して何とか分かりたいと書いている。柔道を習い始めたことは彼にとって本当によかったようで、その作文にもそのことがはっきりと書かれている。みんなに自分をアピールでき、自分の存在感を確かめられているようである。その中で、架空の

友達に手紙を書くという課題で彼は大変素晴らしい作文を書いた。でも、その中で彼は自分には気の合う友達が少ないと訴えていた。遊びに誘ってくれる友達は何人かいるようだが、どうも心がまだ通い切れないようである。

彼の当スクールでの学習態度の原因は、彼との話の中から掴めた。小学 3 年の時の習い事で受けた、彼にとって自尊心を深く傷つけられる厳しい指導が原因らしい。おそらくその指導者は彼によかれと指導したことだろうが、みんなのいる前での出来事、彼にはショックだったようである。心理学的に言えば一種の虐待となってしまった。

柔道はその自尊心回復には大変役立っているが、学習面でのその解消にはまだ暫く時間がかかりそうだ。それには、そうした彼の状況を正確に把握した上で、彼の自尊心を支える気長で根気強い指導が必要だと考えている。

数週間後、もう授業開始から 30 分。“今日はお休みかな？地区の陸上競技会で、他の同学年の小学生も来てないし。”なんて考えておりましたら、1 台の自転車が塾の駐車場に入って来る音がした。“あれ？”と思う間もなく、「こんにちは～！お願いします～！」と、いつになく元気のいい声で彼が教室に入って来た。「競技会、どうだった？」と聞くと、初めて見せるにこにこ顔で、「優勝しました！」と声も弾んでいた。「おお！それはおめでとう！頑張ったねえ。」と讃えると、「はい！ありがとうございます！」本当に満足顔だった。

足の速い彼が地区の 5 年代表リレー選手に選ばれたことは聞いていた。しかし、成績如何では聞いたらまずいかな？なんてちょっと躊躇したが、聞いてみてよかった。「今日はどうする？30 分遅れちゃったんで、30 分居残ってもいいし、疲れていたらみんなと一緒に終わってもいいよ。」って言ったら、「はい、30 分居残っていきます！」と、即座に答えた。

これにはたまたま自主勉強に来ていて私に質問していた中学 3 年生もびっくり。「よし！じゃあ、頑張ろう！」中学 3 年生の質問に答えた後、彼を呼び、今日やる単元の説明をしてやり始めた。最初はその表情も意気揚々だったが、しばらくして演習に入ると、いつものような態度を見せ始めた。”でも、今日も彼に任せよう。そのうち・・・”時々彼と目があつたが、それでも今日の彼は一生懸命考えているようで、盛んに鉛筆を動かしていた。2,30 分経って、「どう？できたあ？」と聞くと、「もう少しです！」とまだ元気のいい声が帰ってきた。

結局、その日は演習指導はできなかったが、彼にはちょっとしたこうした機会を見付けは、少しずつ心のよりを解きほぐしていくことだと考えている。どうだろうか？

今回も基本は事実のままで、付随することは少しフィクション化しておりますことをご了解下さい。

2000 年 10 月 1 日(日)、3 日(火)、5 日(木)付けの「ひげぐま先生のひとりごと」から。